

# 新学習指導要領に基づく授業実践

— 「話す力」の系統的指導を目指して (1) —

松浦 伸和 池岡 慎 大野 誠 川野 泰崇  
千菊 基司 多賀 徹哉 山岡 大基 山田佳代子  
幸 建志

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景

平成20年3月に学習指導要領が改訂された。今回の改訂の特徴をまとめると以下のようなになる。

#### ① 問題解決型

まずは、「問題解決型」である。すなわち、現在行われている英語教育において、課題として指摘されている事柄を解決することを目指している。平成20年1月に出版された『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』では、外国語科の課題として、発信力のさらなる育成やまとまりのある文章の表現などが指摘されている。学力の点から課題やその原因を分析して、それを改善しようとするところに特徴がある。

#### ② キーワードは「つなぐ」

小学校5、6年でそれぞれ年間35時間の「外国語活動」が導入され、英語教育の入門期が小学校におろされた。小学校外国語活動で、聞くことや話すことに慣れ親しむような指導がなされることから、特にその領域で小学校との連携、すなわち小学校と中学校をつなぐことに配慮する必要が生じてきた。

次に、技能と技能をつなぐことである。中学校の目標は、「聞くこと、話すこと」に加えて「読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力」を育成することが加わった。その際、それぞれの技能を単独に指導するだけでなく、「聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりする」など技能と技能を統合する活動が求められている。

さらには、言語材料と言語活動をつながなければならない。言語活動には、「言語材料について理解した

り練習したりする活動」と「実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動」の2種類がある。これまでは英語教育の入門期であったこともあり、前者の指導が不十分であった。小学校外国語活動の導入を受けて、中学校ではこれまで以上に正確さが求められる。すると文構造や文法項目を正しく用いるための練習が必要になる。

もちろん、かつて行われていた「文法のための文法」のような指導を行うべきではない。文法項目や文構造など言語材料を「コミュニケーション活動を支えるもの」としてとらえ、コミュニケーション活動と関連させて指導することが重要なのである。

#### ③ 大幅な時間増

大幅な時間増も今回の特徴である。これまで、各学年105時間から、140時間に増加した。しかし、時間が増えたにもかかわらず、語彙数を除いて言語材料はほとんど増えていない。この増えた時間は、技能の到達ゴールを高めるために使ったり、2年生では1年生の学習内容を「繰り返して指導し定着をはかる」などのために使わなければならないのである。

それらの特徴を踏まえた改訂に基づいて、これからの英語教育がどのように展開されていくかを検討することが、喫緊の課題である。本研究では、「話すこと」を取り上げてその系統性のある指導を目指す。

### (2) 研究の目的

本研究は、新中学校学習指導要領が平成24年度から全面的に実施されるのを前に、外国語科の改訂内容を整理するとともに、「話すことの指導」、とりわけ英語によるスピーチの指導に関する広島大学附属福山中・高等学校（以下、当校）での実践を振り返り、その指

---

Nobukazu Matsuura, Shin Ikeoka, Makoto Ohno, Yasutaka Kawano, Motoji Sengiku, Tetsuya Taga, Taiki Yamaoka, Kayoko Yamada, Kenji Yuki: A Practical Approach to the Teaching of English Based on the New Course of Study: Toward Systematic Teaching of Speaking (1)

導をより効果的なものへと改善していこうとするものである。

新中学校学習指導要領の外国語2. 内容(1) 言語活動においては、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」というそれぞれの活動について、指導事項が一部改訂されていたり、新たな内容が加えられたりしている。そのうち、イ「話すこと」の言語活動の中で新たに加えられた(オ)「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」を取り上げ、これからのスピーチの指導方法を提案することを目指す。

研究初年度は、中学3年生での指導の在り方を提案する。中学校最終学年での目標設定や指導内容を提案することは、中学2年生や1年生での指導方法を考えていく上での基準にもなり、系統的な指導につながると考えるからである。

## 2. 研究の方法

### (1) 新中学校学習指導要領について

新中学校学習指導要領における「話すこと」に関する変更点と新たに加えられたスピーチに関する内容についてまとめるとともに、その目的や意義を新中学校学習指導要領解説や他の文献も参考にしてまとめた。

### (2) 当校英語科教師の実践について

当校英語科の教員がこれまでの実践を振り返り、スピーチ指導時の困難点や指導上の留意点について意見を出し合い、それらを分類し、スピーチ指導の際の考慮すべき点や課題をまとめた。

### (3) 指導事例の提案

上記2.(1)の新中学校学習指導要領の内容と、上記2.(2)の課題を踏まえ、中学3年生のスピーチを指導する際の指導の在り方を、指導事例として提案した。

## 3. 「話すこと」に関する変更点

新中学校学習指導要領における「話すこと」の具体的な目標は、「初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする」となっている。改訂前の目標の中には「英語で話すことに慣れ親しみ」という文言があったが、削除された。これは小学校における外国語活動において「慣れ親しむ」ことが行われることを踏まえている。

また、「話すこと」の指導事項としては次の5つがあげられている。なお、改訂前は4項目だったが、到達点が高くなったことを踏まえて、改訂後は1項目が

加えられている。以下にその項目を挙げる。なお、変更された箇所には下線を入れた。また、( )内は現行の内容を示した。

- (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく発音すること。(←「特徴に慣れ」)
- (イ) 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。(←「などが聞き手に正しく伝わるように話すこと」)
- (ウ) 聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすること。(←「述べ合ったり」)
- (エ) つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。(←「いろいろな工夫をして話が長くように話す」)
- (オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。

(ア)～(エ)については、現行の学習指導要領と比較すると、目標がより明確になるような表記へ変更された(下線部分)。

新学習指導要領で新たに加えられたのが(オ)である。(オ)が加えられたのは、与えられたテーマについて自分の意見や主張をある程度のまとまりのある英語で聞き手にわかりやすく話すことを意図している。つまり、情報の発信者と受信者の間で、ある程度まとまりのある英文を基に意味を持った伝達を行う言語活動が求められているということである。

また、新中学校学習指導要領の解説によると、「この活動においては、学校や日常生活などで体験したことや自分の夢など、生徒の学習段階や興味・関心に合わせて、適切なテーマを与えることが大切である。また、絵や実物などを示して聞き手の理解を容易にするなどの工夫をさせることも考えられる。」とある。与えられたテーマについて自分が伝えたい内容を整理し、それをわかりやすく伝えるための工夫をしながら、自分の考えや主張を話す力を育成することが求められている。

## 4. スピーチの指導に関する留意点や課題

スピーチの指導に関する以下の項目について、当校英語科教員それぞれがこれまでの実践を振り返り、意見を出し合った。

- (1) スピーチの指導に関する課題
- (2) 新学習指導要領において、スピーチの指導を通して生徒に育成できると期待される力

(3) スピーチに関する中学卒業時の到達目標

(4) スピーチの評価方法

(1) については、スピーチを指導する際に難しいと考えられることを現行の学習指導要領を基に整理し、(2)～(4)については、新学習指導要領を踏まえて整理したことを以下に示す。

(1) スピーチの指導に関する課題

〈(ア) について〉

・単語レベルでは正しく発音できていても、長い英語を話すときに、強勢や抑揚などが正確にできないことがあること。

〈(イ) について〉

・辞書で調べた語をそのまま用い、聞き手が理解できるかをあまり考えていないこと。  
・発表の際に、顔を上げてはいるが、原稿を思い出しながら声に出すことだけにしか注意ができず、声量が小さかったり効果的なアイコンタクトなどができていなかったりすること。  
・絵や実物などを用意していても、効果的に利用していないこと。

〈(ウ) について〉

・問答はある程度できるが、聞いたスピーチに対する感想や意見を言うことが難しいこと。

〈(エ) について〉

・話を続けるのが難しいことが多いこと。

(2) 新学習指導要領において、スピーチの指導を通して生徒に育成できると期待される力

〈基本的な英語の音声〉

・個々の発音、イントネーション、強勢、リズム、区切りなどへの意識の高揚と正しく話すことができる力。

〈正しく伝える力〉

・文法や語法に関して正しい英語を使用する力。  
・明瞭で適切な声量で話す力。  
・聞き手の理解を促すための工夫(言い換え、難語の回避、短文でわかりやすい文構造の使用、文章構成、接続表現の活用、理解を助けるような情報の付加など)。  
・聞き手を意識した情報伝達の力(絵や実物の利用や、アイコンタクトやジェスチャーなど)

〈質問したり答えたりする力〉

・スピーチ発表後、その内容について問答したり意見を述べ合ったりする力。

〈話を続ける力〉

・スピーチを聞いた後で、その内容について互いに問

答しあう際、つなぎ言葉を用いなどして話を続ける力。

〈まとまりのある英語を発信する力〉

・伝えたい内容を整理して、まとまりのある英語で話す力。

(3) スピーチに関する中学卒業時の到達目標

・学校や日常生活で体験したことなどについてのテーマに基づき、自分の考えや意見を100語程度のまとまりのある英語で、聞き手に理解しやすい工夫をしながら話すことができる。

(4) スピーチの評価方法

・語彙／文法・内容／構成・発音／デリバリーの観点ごとの分析的評価。

・教師による評価、生徒同士の評価、自己評価。

・二段階に分けて評価する場合

〈原稿の段階〉

文法、論理構成などの評価。

〈発表の段階〉

声量、発音、アイコンタクトなどの評価。

・話し手が伝えたかった内容と、聞き手が理解した内容の適合度による評価。例えば、スピーカーが伝えたい内容のポイントが5つあったとしたときに、ある聞き手が5ポイントすべて理解していたのか、あるいは2ポイントしか理解していなかったのか、といった割合を評価基準とするもの。

新学習指導要領においては、「話すこと」の指導事項「(オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」が加えられたので、まとまりのある英語で聞き手にわかりやすく話すことを意識して指導することが求められる。そのために、アイコンタクトやジェスチャー、絵や実物を使うことなどの工夫をさせることも必要である。

また、今回の改訂では、「4技能の総合的な育成」が大きな特徴である。スピーチ活動では、例えば、原稿を準備する段階で、その材料としての教材を読む活動を行えば「読む力」を、原稿を書く段階では「書く力」を、スピーチの練習や実際の発表の段階では「話す力」を、話し手の英語を聞く段階では「聞く力」をそれぞれ育成することができ、4技能を総合的に向上させることが期待できる。さらには、アイコンタクトやジェスチャーなど、特にスピーチ活動を通して育成できることもある。

## 5. 中学3年生における指導事例

ここでは、中学3年生でおこなうスピーチ活動の指導事例を提案する。

### (1) テーマ

My treasure

### (2) ねらい

与えられたテーマについてスピーチ原稿を書き、人前で発表し、他人のスピーチを聞き、その後で質問しあい、発表内容をまとめる等、4技能を総合的に使った活動を通して、自己表現力の向上を目指す。

### (3) 評価規準と評価方法

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度

①積極的に書いたり話したり聞いたりすることができる。

イ 表現の能力

①自分の考えを聞き手にわかりやすく伝える工夫をしながらスピーチをすることができる。

②まとまりのある英文を書くことができる。

評価方法は、アの①やイの②に関しては、授業中の観察や、原稿の語数と内容を評価する。イの①に関しては、主にスピーチを行っている際のデリバリーを、評価シート（資料1）を使って評価する。

### (4) 評価基準

アの① A 大変積極的に取り組むことができた

B 積極的に取り組むことができた

C 積極的でない場面があった

イの① A 評価シートの点 15点

B 評価シートの点 10～14点

C 評価シートの点 5～9点

イの② A 100語程度で、まとまりがある構成

B 100語程度であるが、まとまりに欠ける構成

C 語数不足と、まとまりに欠ける構成

目標とするスピーチのモデルは、教科書に載っているものを基本にするのが妥当と考える。例えば語数については、以下の通りである。当校で使用している中学3年生の教科書COLUMBUS 21（光村図書）には、スピーチそのものが教材として扱われていないが、巻末のChallengeには、*Let's Make a Presentation*という項目があり、そこに載っている英文は119語である。また、ONE WORLD（教育出版）のLesson 4 My Dreamには、130語程度と70語程度のスピーチが載っ

ている。したがって、100語程度を目標にするのが妥当であると考えられる。

### (5) 単元計画（全6時）

第1時 モデルの提示と原稿書き（1）

モデルの提示後、効果的なスピーチのポイントを考え確認させる。その後、スピーチのテーマを与え、話す内容を考えさせる。

第2時 原稿書き（2）

英文原稿を書かせる。完成したら、6人程度のグループで回し読みさせ、わかりにくい箇所を意見交換させ、修正させる。

〈ポイント〉

原稿作成段階では、わかりやすく伝えるために、内容のまとまりや構成を意識させる。

第3時 グループ練習（1）

6人程度のグループで互いに練習させ、発音や理解しにくかった箇所などを意見交換させる。

第4時 グループ練習（2）

6人程度のグループ内で発表させる。発表の際には、難しい語を表示したり、絵や実物を効果的に使用したりするなどの工夫をさせることで、内容を伝わりやすくさせる。評価シートに基づき互いに評価させ、改善点を見つけた上でスピーチ大会に備える。

〈ポイント〉

練習では、声の大きさや発音に気をつけさせることに加え、わかりやすく伝えるための工夫をさせる。例えば、「4.（1）スピーチの指導に関する課題」にあるように、アイコンタクトが効果的にできないことが多いが、この段階からアイコンタクトを意識させ練習させる。

第5時 スピーチ大会（1）

クラスの半分の生徒に全員の前で発表させる。一人ひとりの発表後、聞いている生徒が質問し、発表者が答える時間を設ける。

第6時 スピーチ大会（2）

クラスの残り半分の生徒に発表させる。

〈ポイント〉

発表では、評価項目に気をつけさせ、聞き手に内容が正しく伝わるように注意させる。スピーチ大会では、確認できるようにビデオ録画しておく。

## 6. おわりに

本研究では、平成24年度から全面的に実施される新中学校学習指導要領の外国語科の改訂内容のうち、2.内容（1）言語活動のイ「話すこと」を整理した。ま

た、それを踏まえた効果的な指導法を目指すための準備段階として、これまでの当校英語科教員のスピーチ活動の実践を振り返り、新中学校学習指導要領の基で育成させることが期待できる力を整理した。そこから見えたことは、新学校学習指導要領のもとでは、スピーチ活動によって、「聞き手の理解を容易にするための表現や場面にふさわしい表現を用いて話す力」、「効果的な構成にして話す力」、「絵や実物、アイコンタクトなどを用いて話す力」、「正しい発音や明瞭で適切な音量で話す力」といった力をこれまで以上に育成することが期待できるということである。また、スピーチ活動を「話す力」だけでなく、4技能の総合的な育成の場として位置づけられるということである。今後は、「話す力」の伸びを検証する方法も含めて「話す力」

の系統的指導を目指す。

#### 参考文献

- 1) 東後勝明ほか(2008)『COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE 3』光村図書
- 2) 新里眞男ほか(2008)『新学習指導要領ハンドブック 中学校英語』時事通信社
- 3) 平田和人編(2008)『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』明治図書
- 4) 松本 茂, 伊東治巳, 高橋一幸ほか(2008)『ONE WORLD English Course 3』教育出版
- 5) 文部科学省(2010)『中学校学習指導要領』
- 6) 文部科学省(2010)『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂

#### (資料1) 評価シート

Evaluation Sheet								
(3 : Very good 2 : Good 1 : Not good)								
No	Name	発音	声の大きさ	アイコンタクト	実物・絵の効果	内容の伝わり度	総合点	評価
		3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1	15	A, B, C
1		3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1		
2		3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1		
3		3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1		
4		3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1		
5		3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1	3-2-1		

※ 以下省略